「流行正月（はやりしょうがつ）」再考――近世民俗の史的考察――

村上紀夫*

要旨

「流行正月」について、先行研究では「悪しき年を送る」ことを期待して発生する通時的な現象とされ、歴史的解釈が批判されている。しかし、宝暦九年（一七五九）の流行正月は「悪しき年」ではなく、豊年のなかで全国的に行われた。この時は、豊年だが翌年に疫病が流行することを予言する摺り物が流布していた。宝暦の流行正月の広がりは、豊年による利益の確保と将来の損失回避のためであった。また、正月行事にともなう贈答儀礼が多くの人を巻き込んだ。この時、全国的な疫病流行がなかったことで、流行正月は疫病除けの効果が期待できるものとして意識された。安永七年（一七七八）、文化一一年（一八一四）と全国的な流行正月が確認できるが、宝暦の事例がモデルケースとなった。

摺り物による情報の取得や損失回避の行動などを積極的に行ったのは一八世紀半ばに成長した身分的中間層であり、彼らが積極的に流行正月を行い拡大したと思われる。

キーワード：流行正月　摺り物　損失回避

はじめに

深刻な飢饉や疫病が、年が改まったからといってよくなるなどとは、誰も本心では思っていなかっただろう。にもかかわらず、「流行正月」は、なぜ行われたのか。

「流行正月」とは、一年の途中で松を立て餅を搗くなどの正月行事を行い、年を改めようとすることである。取越正月・仮作正月・にわか正月ともいう[1]。

流行正月については、はやく折口信夫が「改めて神の来臨を乞う」「信仰上の正月」だと述べているが、ここでは神迎えと正月行事の関連事項として言及するのみで、主題として詳しく論じているわけではなかった[2]。

平山敏治郎の「取越正月の研究」が、この問題に関する最初の専論であり、いまなお通説的な位置を占めている[3]。平山は、近世の文献史

令和３年７月６日受理　*文学研究科文化財史料学専攻　教授

料を博捜し、さらに他の民俗例などを参照した上で、疫病などの社会生活を脅かすような事象に対し、「難を避け除くために、悪しき年を送って新たなる年を迎うれば願望成就する」という考えがあったことを指摘する。

ここで、平山は「取越正月」の伝承性に着目し、「必要があれば何時でも類型的に出現する」ものであるとして歴史的解釈を批判している。平山は、取越正月と「仏の正月、重ね正月、年違え餅」などの民俗を「同類と考えられる」とした。葬儀を出したイエでの行事や厄年に行うことなど、個人やイエのレベルで行われている民俗との共通性を見いだしている。

しかし、流行正月はイエや共同体を超えて、広範囲に広がりを見せることがある。平山は、その理由を「古くしてかつ時あって甦る伝承的な心意の底流から湧き出た信仰」[4]と説明する。しかし、そうした本質主義では、近世に流行正月が頻繁に発生しているにもかかわらず、近代には大規模に発生していない理由を説明することができないだろう。

この疑問に対して、注目すべきは宮田登の見解である。宮田は、近世の磐城国で行われた流行正月について触れ、「これは『世直り』の意識に連なっている」とする。[5]流行正月と「世直り」「世直し」[6]との接続である。これに先立ち、宮田は日本の民俗社会における終末観と、その後のユートピア像についてミロク信仰という視点から論じるなかで、流行正月についても言及していた。そこで、近世ミロク信仰は、この世の悪しき部分を除去し、豊年をもたらすという心意を儀礼化した「取越正月・はやり正月を基底に成立したのである」としている。[7]とすれば、宮田は「世直し」に通じる心意は、当初は流行正月に表象され、それを基礎として後にはミロク信仰にかたちを変えると考えていたことになろうか。

平山が悪しき年を送るといった通時的な現象ととらえた流行正月を、宮田は近世にさかんに語られていた「世直し」という思想の母体として捉えなおしたのである。そうすれば、流行正月は、近世の民衆信仰史の根底に関わる重要な事象ということになり、宮田が注目する民衆宗教の歴史的前提として対象化すべき事象といえよう。

平山は民俗の歴史的理解を「皮相的」と批判しているが、宮田の理解に立つならば、流行正月のありようも、近世初期と「世直し」が意識化される近世後期のそれでは、おそらく異なったものになる可能性があろう。しかし、宮田の関心はミロク信仰や人神に向けられていくが、流行正月そのものの歴史的変遷については詳細に論じられていなかった。

近世後期の流行正月について、歴史学の視点から論じたのは、落合延孝である。落合は、地域社会における民俗の一部が、のちに民衆運動につながっていくとする。流行正月もそうした危機に対応する民俗として言及している。だが、流行正月が幕末期に盛んに行われた理由として落合が「コレラの流行と関連がある」とするのは問題がある。[8]コレラが最初に日本に入った文政五年（一八二二）・猛威をふるってい

た安政五年（一八五八）ころにも流行正月は確認されるが、全国的拡大が確認されるわけではない。幕末に盛んに流行正月が行われたと言えるかも疑問で、後述するように一八世紀半ばから一九世紀にかけての方が顕著な流行を見せている。フォークロアから民衆運動へという図式も、流行正月が誰によって、どのような心意で担われていたかを明らかにしなければ、印象論にすぎるといわざるをえない。

落合とは違う視点で、民衆運動と流行正月について論じるのが民衆思想史の研究者である安丸良夫である。安丸は、近世随筆に「多くの民衆が突然大きな不安にとらわれる」現象があらわれることを指摘した上で、かかる不安をもたらすような風聞の根拠として疫病の流行とその被害の大きさを挙げる。「病気と死」は権力が管理し得ない「根源的な否定性」であり、世界全体の不調を象徴するものであり、流行正月などは世界の凶変をまぬがれるための祓除儀礼としてが行われたという。[9] 安丸は、不安がもたらす民俗が権力の制御から逸脱しようとすることで生じた緊張感に注目した。

だが、実際に史料を見れば、時ならぬ正月の到来に「迷惑そうにはしながらも、内心は悦んでいることが察せられる」[10]のも事実であり、不安に駆られての行為とも言いかねる。権力側の対応もほぼ黙認に近い。

宮田は都市の崩壊という潜在的な不安感と終末観を結びつけ[11]、安丸も近世社会がもつ根源的な「不安」について論じているが、それでは常に不安をはらんでいることになる近世都市にあって、特定の年だけに流行正月が急速に広がっていくことの説明ができない。なぜ、この年だったのか、そして、流行正月という手段が選択されたのだろうか。

これまでの「流行正月」研究は、あまりにも「悪しき年を送る」という類型的な理解にとらわれすぎていた。平山は「日付のみを基準として歴史的な理解を求めることは、皮相を撫でるばかりで、真実な内面的な関連に到達する所以ではなかった」という。そうした視点も重要には違いないが、本質主義にすぎて個々の現象を歴史的に理解することを等閑にしすぎていたのではないか。

本稿では、印象論や超歴史的な理解から脱却するために、まず近世の史料から流行正月に関する記事をできるだけ広く集め、時系列に沿って分析することとしたい。

そして、分析にあたっては、平山敏治郎が「取越正月の研究」で紹介した宝暦九年（一七五九）の事例を出発点としたい。宝暦の流行正月を取り上げるのは、詳細は後述するが、いくつかの点でそれまでのものと異なっていることにある。ひとつは、豊年のなかで行われている点である。これまでの研究で言われてきたような望ましくない現状を変えるために行われるのではなく、予言された来るべき凶事をあらかじめ回避するための予防的行為として行われている点が特徴的である。

そしてもうひとつは、江戸のみならず、上方の大坂、京都、大和、近江まで極めて広い範囲で行われていることが史料的に確認できることである。特定のイエや地域内で完結しない影響範囲の大きさも、そ

れまでには見えなかったものだ。

こうした、宝暦の流行正月そのものがもつ画期性に加えて、当該期が「宝暦・天明期」を「江戸時代の分水嶺」といわれるような、「平和の時代に社会の底流において大きな変動が起き、ひとつのうねりとなって次の時代との分岐をなした」時期とみなされていることがある。[12]

このような時期の宝暦九年（一七五九）の流行正月について具体像を解明した上で、一九世紀の流行正月について歴史的に見ていくことを試みたい。そうすることで、民俗の変遷にとどまらず、近世期における大きな社会意識の変化を浮き彫りにしてみたい。

一　宝暦九年の流行正月

近世に行われていた流行正月について、可能な限り同時代史料によって、管見の及んだ範囲で整理したものが後掲の表である。

一七世紀から一八世紀前半の流行正月は、基本的に地域も限定的で、凶作や疫病などの理由があるか、神託といった超自然的な存在のはたらきかけによって行われていたことがうかがえよう。

それまでと大きく様相を異にしていたのが宝暦九年（一七五九）に全国で行われた流行正月である。杉田玄白による『後見草』は、この流行正月について次のように記している。

【史料1】

宝暦九年の夏の比より誰仕出せしといふ事もなく来る年ハ十年の辰年也、三河万歳の謡る未録十年辰年に当れり、此年ハ災難多かるへし、此難を遁れんにハ正月の寿を祝ふにしく事なしと申触たり[13]

「ミロク十年」という表現に宮田登は注目したが、ここでは「此年ハ災難多かるべし」という部分に注意したい。来年は「ミロク十年」に該当するから、災難が多いだろうと予言し、災難を回避するための手段として「正月の寿」が示されていることになる。現時点で発生している災厄を祓うわけではないことを確認しておく必要がある。

さらにいえば、翌「ミロク十年」に伴う災難を除去するために正月を祝うという理由も不明瞭である。通説通り、正月を祝うことが年を送って「新しい年を迎える」のだとすれば、宝暦九年（一七五九）夏に正月を祝ってしまえば、期間は短く出来るとしても約半年ばかり早く災厄の年がやってくる。しかも、「宝暦九卯の年は時候よく整ひて五穀よく熟し、五畿七道ともに豊年」だったという。[14]秋の豊かな収穫を前にして、どうして敢えて「世直し」をせねばならなかったのか。通説のような「難を避け除くために、悪しき年を送って新たなる年を迎う」[15]では十分に説明がつかない。

「辰の年大きやう年成しを取越祝へバ六月ゟ当年十二月迄辰ノ年の移リ辰の正月ゟ巳ノ年と点ずる由也」[16]という理屈のようだが、豊年を早めに終わらせて災厄の年を早々に迎えるのも筋が通らないし、災厄を最小にとどめるなら、あわてて夏に正月を実施するまでもなく、歳末まで待ち、正月までの残り少ない時期に行う方がいいはずだ。平山自身も[17]「この論理はわれわれには奇異に考えられる」とする。

平山は、現代人には奇妙に見えるが「当時は容易に理解され承認されたようである」として論を進めている。しかし、同時代においても「ヶ様成不難の能年を早立ル事あるまじ」という声もあった[18]。「新歯朶集」を記した渡辺善右衛門自身も「豊年之所俄正月」をするのは「古今不審」だろうから、後代に伝えるために筆を執ったと跋文で述べている[19]。やはり、同時代においても理解しがたい現象だったのである。前近代社会の思考は現代とは異なり非合理的であったという無意識の前提に立つのではなく、実態に即して見ていく必要がある。

「夏の比」の出来事として流行正月を伝える【史料1】の『後見草』中巻は、杉田玄白の著作である。宝暦九年（一七五九）頃の玄白は江戸で町医師として活動していたから、おそらくは江戸での見聞だろう。「三河万歳」について言及されていることも、そうした推測を補強する。三河万歳は江戸をはじめとした関東一円を檀那場とし、京・大坂といった上方では主に大和万歳が活躍していた。だから、『後見草』の舞台は上方ではない。つまり、江戸での流行正月の流行は「夏」、すなわち四～六月のことだということになる。

秋になると今度は江戸ではなく上方で、流行正月が見られるようになる。初秋に山陽道[20]、あるいは山陰道[21]から東へと伝播し[22]、摂津有馬・尼崎では八月朔日を元日とし、それよりも後に流行が始まった大坂では八月中旬に流行正月を行った。のち河内・大和・山城・近江へと広がっている[23]。淀では、九月朔日を正月としたが、間に合わなかった人は一六日までであればいつでも正月をしてよいということだったらしい[24]。

九月には、さらに東の伊勢松坂まで広がっていたらしい。伊勢松坂で医師を開業していた本居宣長の「日録」には、宝暦九年（一七五九）九月のこととして、

【史料2[25]】

今月、町々家々正月之儀式ヲナス、或餅ツキ、豆ハヤシ、雑煮等アリ、甚シキ者ハ、門飾、松ヲタツルニ至ル、他国ヨリ段々流行来ルト也

本居は「他国」から「流行」してきたものだと明確に記している。以上のことから、宝暦九年（一七五九）の流行正月は、西国では「初秋」（七月）から九月にかけて、西から東へと比較的短時間で広範囲に伝わっていたことがわかる。

なお、近江国蒲生郡鏡村の記録には「当国ゟ正月はやり出し、八九月頃京大坂在々迄」が「常の正月ことく」祝ったとあり[26]、むしろ近江が発火点で八～九月に京・大坂へ西上したかのように記されている。しかし、八月一日に尼崎・有馬で、以後に大坂、そして京都という広がりかたを見ると近江から西へというのは首肯しがたい。交通の要衝にあり、米屋を営み京都とも盛んに書状のやりとりをしていた玉尾家の記録であるから[27]、同家周辺が大坂・京あたりでの情報をいち早くつかみ、他に先がけて正月行事を行ったことで、近江から京・大坂へと広がったように見えたのかもしれない。

いずれにしても、注意しておきたいのは、江戸では夏に確認できる

14	1854～5	嘉永７年～安政２年	７月、閏７月朔日	大和初瀬谷・紀州、江戸、馬籠	閏７月15日古市など、大和豊作 江戸では７月下旬に「来月はやり病」「牡丹餅を拵へて……」と流言、翌年に馬籠で当月悪月で年を祭り替えるべしと噂	『大和国高瀬道常年代記』、「永代万控」、『武江年表』、「大黒屋日記抄」
15	1857	安政４年	３月14日	上野国下田島	悪風邪流行により正月出直し	落合延孝『猫絵の殿様』
16	1858	安政５年	７月・９月	江戸、上野国尾嶋	コレラ流行による	『武江年表』、『安政箇労痢流行記』、落合延孝『猫絵の殿様』
17	1859	安政６年	７～８月	近江国滋賀郡	コレラ流行に伴う悪年送り、賑わいの一環として	「記録帳」（小野区有文書）
18	？	不明（明和カ）		江戸？	佐藤中陵は宝暦12年（1762）、江戸生まれ、	『中陵漫録』

出典）『御湯殿の上の日記』（『続群書類従　補遺３　お湯殿の上の日記（八）』続群書類従完成会、1934年）、『兼見卿記』（『史料纂集　新訂増補兼見卿記』第２、八木書店、2014年）、『武道伝来記』（岩波文庫、1977年）、『多聞院日記』第４巻（三教書院、1938年）、「万之覚」（『榎本弥左衛門覚書』平凡社東洋文庫、2001年、『江戸町触集成』第１巻（塙書房、1994年）、『月堂見聞集』（『近世風俗見聞集』第１・２巻、国書刊行会、1912・13年）、「至享文記」（『大阪市史史料　近世大坂風聞集 至享文記・あすならふ・あすならふ拾遺』大阪市史編纂所、1988年）、『後見草』（『改訂史籍集覧』第17冊、すみや書房、1968年）、『宝暦雑録』（『上方芸文叢刊８上方巷談集』上方芸文叢刊行会、1982年）、『摂陽奇観』巻31・35（『浪速叢書』第４巻、名著出版、1978年）、「新歯朶集」（淀渡辺家文書・京都市歴史資料館寄託）、『続史愚抄』巻76・81（『新訂増補国史大系』第15巻、吉川弘文館、1966年）、「玉尾家永代帳」（国立史料館編『近江国鏡村玉尾家永代帳』東京大学出版会、1988年）、本居宣長「日録」（『本居宣長全集』第16巻、筑摩書房、1974年）、『浪花見聞雑話』（『随筆百花苑』巻７、中央公論社、1980年）、『定本　武江年表』全３巻（ちくま学芸文庫、2003～４年）、『半日閑話』巻12（『日本随筆大成』第１貴第８巻、吉川弘文館、2007年）、『源蔵・郡蔵日記』（矢祭町史編さん委員会、1979年）、３頁）、『洗革』（国立国会図書館蔵・国立国会図書館デジタルコレクション）、『籠耳集』（『浪速叢書』第11巻、名著出版、1978年）、『豊芥子日記』中（『近世風俗見聞集』巻３、国書刊行会、1913年）、『街談文々集要』（『近世庶民生活史料　街談文々集要』三一書房、1993年）、『きゝのまにまに』（『未刊随筆百種』第６巻、中央公論社、1977年）、『梅園日記』（『日本随筆大成』第３期巻12、吉川弘文館、1977年）、「荒蒔村宮座中間年代記」（『改訂天理市史』史料編第１巻、1976年）、『大和国高瀬道常年代記』上巻（清文堂出版、1999年）「永代万控」（『粉河町史』巻３、粉河町、1988年）、「大黒屋日記抄」（『藤村全集』第15巻、筑摩書房、1968年）落合延孝『猫絵の殿様』（吉川弘文館、1996年）『安政箇労痢流行記』（『安政コロリ流行記 幕末江戸の感染症と流言 仮名垣魯文『安政箇労痢流行記』翻刻・現代語訳』白澤社、2021年）、「記録帳」（小野区有文書『志賀町誌』第５巻、志賀町、2005年）、『中陵漫録』（『日本随筆大成』第３期巻３、吉川弘文館、1976年）

表）近世流行正月一覧

番号	西暦	和暦	月日	地域	備考	典拠
1	1583	天正11	閏正月１日	洛中洛外	貴船託宣（『御湯殿の上の日記』『兼見卿記』	『御湯殿の上の日記』『兼見卿記』
2	1573-1593?	天正の比	６月朔日	陸奥若松？	「鹿島の事ふれや告来りけん」。同時代史料未確認	井原西鶴『武道伝来記』巻一第三
3	1593	文禄２	閏９	京（？）	京大仏上棟により秀吉が命じたとの風聞	『多聞院日記』文禄２年９月24日条
4	1652	慶安５年	８月頃	駿河国沼津		「万之覚」（『榎本弥左衛門覚書』）
5	1667	寛文７年		江戸近辺町屋迄		『江戸町触集成』1-632
6	1730	享保15	霜月朔日	南都	南都飛脚の情報、この年は流行病	『月堂見聞集』「至享文記」
7	1759	宝暦９年	夏の頃～９月頃	江戸（夏）、山陽道、摂津、大坂、河内・大和・山城・近江・伊勢松坂（８～９月）	「難を遁れんにハ正月の寿を祝ふにしく事なし」	『後見草』中、『宝暦雑録』、『摂陽奇観』巻31、「新歯朶集」、『続史愚抄』巻76、「玉尾家永代帳」、本居宣長「日録」
8	1751～64	宝暦年中		大坂	宝暦９年のことか	『浪花見聞雑話』
9	1771	明和８年	10月		〔補〕の記事で斎藤月岑による嘉永刊本には記載なし	『定本　武江年表』
10	1772	明和９年	８月頃	江戸？		『半日閑話』巻12
	1776	安永５年	６月15日	奥羽宝坂村	はしか流行のため「其よけ」に正月神事、「ころり道心」という人形送りを25日に実施	『源蔵・郡蔵日記』
11	1778	安永７年	６月朔日	江戸・京（含・禁裏仙洞）・大坂	山で疫病流行の予言を聞いた若狭から広まる（『洗革』）、宮中から（『半日閑話』）	『摂陽奇観』35巻、『半日閑話』巻14、『続史愚抄』巻81、『洗革』、『籠耳集』
12	1814	文化11年	４～７月中旬	江戸	江戸及び諸国大干魃	『増訂武江年表』
13	1814	文化11年	５月朔日	江戸（夏）、大坂・大和（９月）	四月上旬より流言、「明言神猿記」売り歩き。80歳程の老人「八歳ばかりの頃、年の半途に正月を祭り致し候こと有之」と（『街談文々集要』）	『豊芥子日記』中（同じ筆者による『街談文々集要』もほぼ同文）、『きゝのまにまに』、『梅園日記』、「荒蒔村宮座中間年代記」

にもかかわらず、西国の伝播は徐々に江戸から西上するのではなく、山陽道か山陰道という遠く離れた場所に飛び火し、そこから東へと広がっていたと見られることである。もちろん、江戸・西国での流行正月が偶然にも同時多発的に始まって、それぞれの地域で拡大したとも考えられなくはないが、海運業者などの手で西国に運ばれたと考えるのが妥当だろう。

ここで、注意しておく必要があるのは、その流行正月への接し方である。渡辺善右衛門は「長閑にして誠の春」のようだなどと繰り返し言っており、決して終末への恐怖に我を忘れているような様子は見えない。平山が指摘した「迷惑そうにはしながらも、内心は悦んでいることが察せられる」[28]という点は改めて確認しておく必要がある。それでは、こうした流行正月を行ったのはなんのためだったのか。

二　流行正月をめぐる噂

江戸では【史料1】で見たように「来る年ハ（略）災難多かるへし、此難を遁れんにハ正月の寿を祝ふにしく事なし」という噂が流れていた。ただ、その根拠として来年は「三河万歳の謡る未録十年辰年に当れり」ということであったが、三河万歳は関東を檀那場とする芸能者であり、上方では馴染みもなく、こうした言説がそのまま受け入れられたとは考えられない。

そこで、『新歯朶集』を見ると、上方では多様な噂が広がっていたことがわかる。次に主要なものを列記しよう。

①「摂劦」の「土民」某が、ある夜の夢で老翁から当年は豊年だが、「九月ニ到て悪きれい」という悪病が流行し、「万人是に伏ス」ことになる。正月行事を行ったものだけは病を免れることが出来ると告げられたという。

②「閏月十四日の早天」（宝暦九年は閏七月）に鳳凰の形の紫雲がたなびき、播州の百姓の山では一夜にして草が正月飾りで使われる「裏白の大しだ」なった。その後、「たれいふともなく難波の辺へ弘ま」ったという。この情報は「正月の事にて板行にして辻小路ゑあまたのあき人手々に持出たり」とのこと。

③播州姫路の城主酒井雅楽頭殿が、城内に祀る刑部姫と対面し、「当年豊年の処悪キやまい時花へし、依て是を除ンとおもハば正月のぎしきを早仕ン」と告げられたという。姫路の城主が門々に松飾りをして正月の祝義を行ったことが大坂へも広まったという。

④播州の七歳になる娘が行方不明になっていたが、ある日に両親のもとにあらわれ、「我ハ山の神に召れ」ているが、として同様に悪疫流行のことを告げたという。ことの次第を「板行にして持来ル」という。

以上の噂は①が「九月」の悪疫を予言していることから、八月以前に流布したものとわかる。②は閏七月一四日のできごととして語られているから、少なくとも流布はそれ以降、やはり八月頃のことであろう。こうした奇妙な噂に加えて、後付けの合理的な説明もなされていたようだ。

⑤「去寅ノ年」に餅米を大量に仕入れていた大坂商人が、想像以上に売れ行きが悪かったので、在庫を売り切るために「正月を取越此米をはかさんとての事のよし」という噂もあった。ただし、これは流行正月の仕掛け人をあげつらうものであり、流行正月が一定程度の広まりを見せてから後付けで語られたものであろう。

⑥以上のほかにも多種多様な情報が飛び交っていたようだ。「いろ〳〵さま〳〵セツまち〳〵可成し、印（記す）にゑきなし」と渡辺善右衛門は書き記している。

興味深いのは②④は、いずれも「板行」され、瓦版のようなものを介して広まっていたらしいことである。著者の渡辺善右衛門は、「淀へも板行度〳〵方に来ル」と頻繁にこうした摺物の情報に接していたことを伝えており、④については「すき返岳に板して四ツ折赤岳ニて二所封したる」ものだと詳細に形状を記しているから、確実に彼も目にしていたようだ。

これらの情報を見ていて明らかなのは、その内容がきわめて多様性に富んでいることである。来年は疫病が流行する、それを回避するには正月を祀ればよいという奇妙な情報は共通するが、それを伝えた存在については老翁、山の神、刑部姫とまったく一致していない。その理由も特に説得的な理由が説明されているわけではない。まさに説明なしの「お告げ」なのである。

かかる不確実で錯綜した情報に対して疑問を抱くのは当然で、あとから米屋による在庫処分のための策略だといった陰謀論が登場するのも故なしとはしない。同時代の人びとにとっても、こうした一貫性のない情報を鵜呑みにしたとは考えにくいのではないだろうか。

とすれば、論じられるべきは、出所不明の信憑性が低い情報にもかかわらず、人びとは正月を祀るという行動を起こしたのかであろう。「年々色々さま〳〵成セツ沙汰ハ有ルと雖、仮染の事故皆成就セす消行也、此度の一義者いか成事や成就して世上一統に弘リ用て有之」という渡辺善右衛門の発言に耳を傾けたい。彼が記しているように、それまでも都市伝説・世間話とでもいうべき多様な噂は、断続的に現れ、流布し、そして時間とともに忘却されていた。にもかかわらず、この流行正月だけは、なぜ消えることなく「世上一統」に流布したのだろうか。

それまでの流行正月と異なるのは、豊年のなかでの言説だったことだ。そして、噂の内容が豊年による現状を認めた上で、将来の疫病による損失を予言していたことが画期的であった。

単に将来の疫病の予言がなされているだけであれば[29]、現状維持バイアスがはたらき、人びとは不確実な予言のために敢えて行動を起こすような必要性はあまり感じないだろう。しかし、既に豊年という環境にあって、通常を上回る利益を得ていたり、利益の増大が予想される人びとには保有効果がはたらく。手にしたものは、手放す際に大きな心理的抵抗を感じ、できるだけ損失を回避しようとするという[30]。豊年で思いがけない幸福を目にした人びとが、損失の予言に接して、それを回避して確実に利益を得ようという行動に出たということだろう[31]。

こうした行動は連鎖反応を起こして広がっていった。

また、全村を挙げて「休み」にして正月行事を行うところがあった一方で、西岡あたりでは「ヶ様成不難の能年を早立ル事あるまじ」と言ってまったく行っていないから、すべての人が熱狂的に流行正月を行ったというイメージは正確ではない。「かたいぢはりてかまワざる人」もいたらしい[32]。こうした温度差があったことは確認しておきたい。

ただし、こうした人が「かたいぢ」を張っていると見られていることにも注意が必要である。興味深いのは、渡辺善右衛門が流行正月に巻き込まれていくプロセスである。彼は八月二五日に八百屋が掃除をしているのを見て、「来月祭礼故」かと思っていたくらいで、「少も我ハ不知也」という状態であった。しかし、その日の申の刻になって同僚の亀山氏が「神の棚荒神棚へ七五三を張、明朝雑煮を祝」と言ってきたのを聞いて、あわてて餅屋に人を走らせている。既に餅屋は多忙でなかなか引き受けてくれなかったが再三にわたって頼み込んで、ようやく餅を搗いてもらえることになった。おそらく、この事実をして、渡辺善右衛門に「俄正月」があちこちで盛んに行われていたことを実感させることになった。乗り遅れてはならじと正月行事の実施を加速させたのであろう。

渡辺善右衛門のもとには正月の贈答品として鯛などが同僚から届いているから、こうした贈答儀礼の連鎖を通して、流行正月にまきこまれた人もいただろう。となれば、その贈答儀礼の輪から距離を取ろうとすれば「かたいぢ」を張っているように見えるだろう。西岡では全村あげて拒否していたのも、そうしておかないと空気に流されかねなかったからだろう。

事態が沈静化してから善右衛門は「人にそむかす祝納て[33]」と記しているが、多くは周囲に同調するようにして次々と参加し、祝祭的な空気をわかちあっていったというのが実態であろう。豊年の予感の中、正月儀式を進めるうちに、各種の吉兆を見ては喜びの声をあげ、折に触れては和歌を詠みあい、めでたさを周辺の人びとと共有していたのである。

この宝暦の流行正月について、渡辺善右衛門は同僚で「九十歳に成りて務メ居」るという鵜飼戸左衛門から「ヶ様の事不覚」と聞いている[34]。局地的に厄払いなどのために年内に正月行事が行われるようなことはあったとしても、こうして全国的に正月行事が波及するようなことは誰にとっても未経験のことだった。とすれば、この事例は後の流行正月のモデルケースとなっていくことになるだろう。

さらに、宝暦九年（一七五九）の翌年に疫病の全国的な流行などがなく、穏やかに過ぎていけば、本当に疫病除けの効果があったと感じられただろう。それまでの地域的に行われた小規模の疫病除けとしての流行正月とは、質的に異なったものになっていったことであろう。こうして疫病が広範囲に広がっている渦中に流行正月が行われるようになる。

宝暦九年（一七五九）の流行正月の流行に次いで、明和にも流行があり、さらに安永七年（一七七八）にも江戸と上方にまたがる大きな

流行があった。

三　禁裏もまきこむ流行正月――安永七年――

安永七年（一七七八）は、不思議にも江戸・京都が一斉に六月一日に正月行事を行っていたようだ。次の史料は江戸の事象について記したものである。[35]

【史料3[36]】

一安永七年戊戌五月晦日、今日江戸ニテ大晦日也ト称シテ大家・小家・貴賤共ニ十二月節分ノ如ク鬼ヤラヒノ大豆ヲ打チ、大晦日祝ヲナシ、厄払ノ乞食出ル、六月朔日ヲ元日也ト称シ門松ヲタテテ雑煮ヲ食シ屠蘇酒ヲ呑ミ鏡餅ヲ設テ祝フ、町家ニテハ商ヲ止メ元日ノ如ク戸ヲ立寄セ簾ヲ掛ル、買人来レハ雑煮ヲ出酒ヲ進ム、宝舟ノ絵ヲ売ル者モ出タリ、江戸中如此一統ニシタルニハアラザレトモ此事ヲナス者多シ、此事モ若狭国ヨリハヤリ出テ諸国ニ伝ヘテ江戸マテ伝来レリトゾ、カノ国ノ土民山中ニテ異人ニ逢シカ、如此スレバ疫病ヲ除クト教ヘシユヘ此ヿヲ行ヒ始メタリト云、古ヨリ如此ノヿヲ聞ス、一怪事也（下略）

【史料4[37]】

（安永七年）

○五月晦日の豆まき　五月晦日豆をまき大晦日なりといふ。太神楽など市に来る。

○六月朔日の雑煮　六月朔日、世俗今日をもて元日とし、雑煮をいはふものあり、元宮中より出し事となん。

【史料3】では若狭から広まったと伝え、山中で「疫病ヲ除ク」方法として「異人」から教えられたと記す。江戸では、宝暦のように疫病流行の予言とその回避法としての流行正月だったようだ。ただし、【史料3】で「江戸中如此一統ニシタルニハアラザレトモ此事ヲナス者多シ」とし、【史料4】で「雑煮をいはふものあり」とするように、すべての人が行っていたわけでもないようである。

ところで、大田南畝が伝える【史料4】では宮中から始まったかのようにも言われていたようだ。そこで、上方の事例を見よう。

【史料5[38]】

（安永七年）今年ハ疫病はやり申候故はやく今年ヲ過し候様とのましなひと申而今六月朔日市中正月元三之儀式雑煮祝頃節分豆も祝申候こと、厄病逃レと申候とて家々餅ヲツキ正月之儀式致申候、京も同様ニ而専ら堂上方も被成候と申事珍ら敷事ニ御座候

ここでは、宝暦の事例とやや異なって、来年ではなく「今年ハ疫病」が流行するので、早々に「今年ヲ過し候様とのましなひ」だと伝えている。そして、この時には豊年のなかに行われた宝暦の流行正月とは異なって、実際に六月に疫病が流行していたらしい。

【史料6[39]】

（安永七年）

一六月　京大坂ニ正月之儀式行ふ

此頃家々に正月の儀式をなし雑煮を祝ひ節分の體をなす事宝暦中のごとし

一同月　疫病流行

傷寒は風のかハりに来れともまた吹かへる伊勢の神風

此歌を書て七ツ葉を添て帯の縫目に入置べし、また門口に張置バ其疫病を遁るゝといひふらす

【史料6】に「宝暦中のごとし」とあるが、宝暦の流行正月から僅かに一九年だから、この時には以前の流行を記憶していた人も多かっただろう。疫病流行の予兆をとらえて、宝暦に疫病除けとして行われていた流行正月が想起されたのだろう。

なお、【史料4】を見ると、江戸においては、今回の流行正月が宮中から始まったことであるかのように語られてもいたようだ。【史料6】では、京の堂上方も同日に正月を祝ったことを珍事と記している。実際に御所周辺ではどうだったのか。

【史料7】[40]

（安永七年五月）

〇三十日己丑。今夜准節分世間打豆（元亨元年有此事、〇愚紳、皇代略前）〇六月小〇一日庚寅。以此日准正朔由有風説。世間設歯固已下。剰此俗延于禁裏仙洞云。元亨元年六月一日有此例。不快。（〇愚紳、長暦、年代記略記）

この史料から、公家にとどまらず禁裏・仙洞御所でも行われていたことがわかる。この記事を掲載する『続史愚抄』は柳原紀光による編纂物ではあるが、安永七年（一七七八）には著者も存命中であり、この事項は柳原紀光自身の日記『愚紳』をも典拠としている。元亨元年の例を引きつつ「不快」といった私的な感想をもらしてさえいる。[41]こうしたことから、この記事は柳原紀光自身の見聞をふまえたもので信憑性は高く、「禁裏・仙洞」でも流行正月が行われたことは事実とみなしてよいだろう。[42]

江戸と同じ六月朔日に行われているので【史料4】のように、安永の流行正月が宮中から始まったとはいえないが、禁中・仙洞御所でさえも行われたという影響力の大きさは注意しておいてよい。

何よりも興味深いのは、安永七年（一七七八）においては、江戸と京・大坂という三都で、おなじ六月一日を正月として祝ったことが確認できることである。

宝暦の流行正月が夏に江戸で始まり、七・八月に大坂・京都、そして九月に伊勢と数ヶ月をかけて徐々に伝播していき、それにともない六月朔日（江戸）、八月朔日（大坂）、八月中、九月朔日と情報が届いた翌月の朔日、あるいは朔日に限らず随時、正月行事を執り行っていた。

それに対し、今回は時差がないのが特色である。江戸・京と東西が一斉に六月一日を正月とすることができたのは、情報の伝播速度が上がったことを示唆していよう。安永七年（一七七八）には、若狭かあるいはそれ以外の場所で発した情報が、五月までに短期間で各地に一気に広まっていたのである。

四　猿の予言――文化一一年――

そして、宝暦九年（一七五九）の流行から約半世紀後の文化一一年（一八一四）にも、全国的な流行正月が確認できる。全国一斉に行われたらしい安永七年（一七七八）とは相違して、江戸では五月朔日に、そして上方でも九月から歳末にかけてと、徐々に広がっている。

斎藤月岑の『武江年表』によれば、「江戸及諸国大干魃」で「門に松竹を建て、疫を禳ふ」と言われていたらしい。豊年のなかで行われた宝暦の頃とは違って、上方で疫病流行が確認されていた安永七年（一七七八）のように、災害の渦中で行われていた。

興味深いのは、その流行正月のきっかけとなったとされる出来事である。まずは、江戸の考証家・蔵書家として知られる石塚重兵衛が伝えるところを見よう。

【史料8[43]】

○第十八　再正月流言

一、同四月上旬（文化一一年）より流言せしハ、当年は世界七分通り死亡いたし、是を遁れ候ニは、再正月を祭り候得ば、右病難相除候由ニ而、餅を舂、門松を建、扨五月朔日を元日として雑煮など祝ひ候もの、世間ニ過半有り。

（ア）文宝亭、筆まかせニに云、

五月何方ゟ言出しけん、此月、正月の如く松たてゝ餅を祝ひ、或ハ豆蒔して正月のまねびをすれバ、あしき病ひをのぞくとて、所々ニ而いろ〳〵なる事をせしよし、

此事、川越の近在ニある庚申塚の森に、猿三疋集りて言出せしゟ、何方ニても斯せしト云々

（イ）又予の聞しニは、

坂本日吉山王の神猿申けるハ、当年ハ天下豊年なりト云、又壱疋の猿言ニは、然共人々の死亡多からんト云々、又壱疋の申ニは、今年も明ケ新年と改候ハゞ宜しからんト申ス、故ニ五月朔日を元旦といたし、右之病難をよけ候ト云々、（中略）

右、猿のもの言たる事ヲ「明言神猿記」ト題して、半紙二枚ニつゞりて、町中をうりあるきしなり。

此節の狂哥に

正月を二度ハいはへど大晦日払のことは何の沙汰なし　蜀山人

（ウ）世上ニかゝる妄言を触るゝ事、往古ゟまゝあり、是を信じて金銭を費すこと、愚なることゝ言ふべし。

このように石塚は、文化一一年（一八一四）の四月上旬から「世界七分通り死亡」するので、難を逃れるには「再正月」をすればいいという流言が広がったことを記している。そして、（ア）文宝亭の「筆まかせ」を引き、川越の庚申塚で猿が言い出したことだという伝聞を書き留める。筆者の見聞を記す（イ）によれば、物を言ったのは川越ではなく近江国の「坂本日吉山王の神猿」だったという。最初に猿が「当年」の天下豊年を予言すると、次に別の猿が人が多く死ぬだろうと告げる。最後に三疋目の猿が「今年も明け新年と改め候て、宜しからん」

と言ったという。今年は人の死亡が多いから、「新年と改め」ることで災難を回避すればいいというわけである。

宝暦の流行正月は、同年は豊年であり、翌年に疫病が流行するので、年を改めることで疫病の流行する年を短くしようというもので、やや理由付けには無理があった。そして、安永の流行正月は疫病が流行しているなかで行われた厄払いのようなものだった。

文化一一年（一八一四）では、宝暦の矛盾を修正するように、当年は豊年であるが同時に「あしき病」が流行する、と予言する。そして、正月行事をして新年とすれば「あしき病ひをのぞく」「右之病難をよけ候」と病難除けになるとされている。

注意を喚起しておきたいのは、こうした情報は単なる噂として広まったのではなく、「半紙二枚」に綴った「明言神猿記」と出した摺り物となり、「町中を売歩行し」者がいたという点である。宝暦の流行と同じように印刷物の影響があったことになろう。

なお、（ア）は筆者の見聞ではなく「文宝亭筆まかせ」[44]からの引用である。ここでは四月ではなく「五月」とするが、「川越の近在にある庚申塚の森」で「猿三疋」が言いだしたことが発端だと伝えている。（イ）では五月朔日を正月としたというから、五月に流行をしたという（ア）の話は、「川越」という地名からみて四月の江戸での流行後、やや遅れて北関東方面へと広がったころの話かもしれない。

北静廬による江戸後期の随筆『梅園日記』では、「文化十一年夏のころ、某の国某の山にて、猿人の如くものいひけるやうは、ことし疫病にて人多く死ぬるなり（下略）」と書かれている。[45]「某」に固有名詞が入っていたか、それともともとから「某」（あるところ）だったのかは判断しかねるが、山中で猿が喋ったというのは、庚申塚の森や日吉山王社とも異なっており、異伝があったことがわかる。

『武江年表』によれば、この時の流行正月は江戸では「四月から七月中旬」に及んでいたようだ。そして、関東での騒ぎが終息した秋頃、この噂が上方まで広がっていた。大和国荒蒔村の宮座で書き継がれていた記録「荒蒔村宮座中間年代記」には、次のような記事が見える。

【史料9】「荒蒔村宮座中間年代記」

一八月悪星出候と沙汰有、又九月頃大坂ニ年直しとして正月改而致、此月堺とやらにさるが三疋出申、一疋之申、申者荒キ年ト申、又一疋申者人が三合ニ成ルト申、又一疋申候者正月ヲ年ノ内ニすれは能ト云、是故正月致してよし、依之当国中八九部迄も皆家毎ニ正月致し候、此正月九月頃より十二月時分迄いたし候[46]

『街談文々集要』が記録したのと同じように、三疋の猿が物を言ったと伝える。ここでは、猿が物を言ったのは「堺」だということになっている。最初の猿が豊年を言うのではなく「荒キ年」と言い、次の猿が「人が三合ニ成ル」と不吉な予言を重ねている点が大きく異なってはいるが、三疋の猿が将来の凶事を予言し、年内に正月を祝うことで回避できると伝えたところまで一致している。

こうした内容の一致から見て、口頭での伝播というよりも、文字情報をベースに拡散し、地名だけを可変部分として、それぞれの地域で

適宜な固有名詞を組み込んでいったのではないだろうか。猿が物を言ったという話は、伝播した先で適宜地名を変えて広がっていた可能性がある。

おわりに

ここまで、全国的に流布した流行正月の事例について、史料を通して宝暦・安永・文化の三例を見てきた。宝暦では、多様な情報が「板行」されて行き交い、徐々に情報が広がっていたこと、当年は豊年であり、翌年の疫病が予言されており、年を改める必要性に疑問を持っていた者もいたことが確認できた。むしろ、豊年の予感の中で、周囲の人びととめでたさを共有しているような現象だった。

安永七年（一七七八）は全国的に六月一日に行われ、禁裏・仙洞御所も巻き込んでいたことが特筆される。そして、文化一一年（一八一四）には、江戸から上方に徐々に広がっていき、摺物も作られていたようだが、宝暦のころとは事なり、情報は猿の予言に画一化されていた。また、猿の予言も当年は豊年だが、同時に疫病も流行するという言い方に変わっている。

いずれにしても、現に上方で疫病が流行していた安永七年（一七七八）は別として、宝暦・文化の例とも、「豊年」が予言されている。平山が言うような「悪しき年を送る」という単純な説明で理解できるわけでもなさそうである。

『武江年表』が伝えるように、文化一一年（一八一四）の流行正月時には江戸をはじめとした地域で「大干魃」が起こっていたのも事実である。ただし、この時に江戸で流行正月が行われていたのは四～七月のことである。秋の収穫期を前にして、大干魃が起こっていたとすれば、懸念されるのは凶作、そして飢饉である。ところが、この時に猿は疫病の危険とともに「豊年」を予言したわけである。とすれば、猿の示唆に従って正月行事を行えば、疫病も回避でき、なおかつ現実に直面している不安要素である干魃も「豊年」という望ましい未来に切り替えることができる。むしろ、その比重は損失回避と豊年という将来の利益確定にあったというべきであろう。

安政のコレラ流行時にも流行正月が行われ、「悪年送候」という言葉も史料に見えているのは事実である。[47] だが、この時も社会不安から「悪しき年を送る」ために行われたという解釈には留保が必要だと考える。というのは、安政六年（一八五九）のコロリの流行を伝える史料に「にぎやかにするがよいと申」とあり、[48] 流行正月も「にぎやかにする」ひとつの手段だったからである。

最後に一八世紀半ばから一九世紀にかけての時期に、流行正月が顕著に見られる理由について検討しておきたい。まず、注意すべきは摺物による情報伝達である。文字情報によるだけではなく、口頭での情報伝達、他者の行為の模倣や同調などが後押しをしただろう。ただ、やはり迅速かつ広域に拡散し、それなりの信憑性をもってうけとめられたのは文字情報の存在があっただろう。[49]

ここまで見てきたような点から、流行正月を自らの意思で行うには次のような条件を満たす必要があったといえる。①たとえ少額とはいえ有償で販売される瓦版を買う余裕があり、②それを理解しうる読み書き能力があり、③自分の意思で「休み」にできる立場にあり、かつ④餅を買うなどの臨時の出費をする経済的ゆとりがある――ということにはなるだろう。損失を回避し、豊年がもたらす利益を確定させたいという意識を強く持っていたのもこうした人びとであろう。

かかる存在として、まず想起されるのが一七世紀後期からの都市発展の原動力となった都市小市民である。守屋毅は家族労働を基本とし、少数の使用人を抱えて小店舗を経営する店持ち・家持ちの自営業者を元禄期以降の都市における「基礎的な階層」として注目する[50]。「都市小市民」の成長は、一八世紀半ばには朝尾直弘がいうような、武士と一般民衆のあいだに形成された、情報を読み解きうる身分的中間層につながっていこう[51]。

情報に接し、自らの意思で流行正月を行いうるような階層が都市を中心に全国的に分厚く形成されたことで、こうした全国的な流行現象を引きおこしうる条件が整った。これが、宝暦期以降に次々と全国的な流行正月が起こった所以である。

それでは、次なる問題は、こうした人びとがなぜ流行正月を行ったかである。流行正月を全国に広げる推進力となったのは摺物だが、宝暦期には固有名詞や内容の詳細に多様性があったことから、特定の人物が仕掛けたものというよりも、次々と模倣、改変を経て拡散していったと考えられる。そして、最初になにがしかの仕掛け人がいたとしても、それだけで爆発的に流行した説明にはならない[52]。受け手がこうした言説を受容し、流行正月という行動に移すには、受け手の側にも相応の動機がなければならない。

ここで想起するのは、噂について論じた松田美佐の議論である。松田は、噂の機能について、従来から言われてきた情報伝達・意見発露の手段に加えて、コミュニケーションそのものを目的として噂が採用されることがあるという。「ここだけの話」という情報を共有することで親密感を抱き、孤立回避につながるという[53]。そして、適度の不安を感じさせ、かつ実行可能な回避策が同時に示される場合、情報は広がりやすいという。

宝暦の流行正月の噂も、豊年をともに悦びつつ、きたるべき悪疫流行の予言とその回避策という情報を共有し、ときならぬ正月をともに祝うという行為を通して、身分的中間層が公共圏を形成する役割を果たした。だからこそ、そこから逸脱している人は、「かたいぢはりてかまワざる人」と見えていたのである[54]。

そして、一九世紀には、かかる公共圏を形成していた人びとは次第に「市民階級[55]」となっていき、輿論を形成していく中核となっていく。情報の伝達や共有、コミュニケーションにあたって、流行正月のような手段による必要はなくなり、近代には行われなくなっていくのだろう。こうして見た時、流行正月は社会の有り様を反映した現象ということも可能であり、平山敏治郎が皮相的と批判したような歴史的解釈

もまた一定の有効性をもっているということができるだろう。

ここまで見たように、すべての人が流行正月を行っていたわけではないし、その行為を批判するような知識人もいた。自ら参加した人びとも、情報のもつ虚構性をわかったうえで、ともに楽しんでいたのであろう。年が改まったからといって何も変わらないことは誰もがわかっていた。他者とつながりを感じるために行っていたのである。

註

（1）以下、本稿では史料・文献の引用を除き「流行正月」に統一する。

（2）折口信夫「年中行事」（『折口信夫全集　第一五巻　民俗学篇1』（中公文庫、一九七六年、一〇七頁）。なお初出は一九三〇～三二年

（3）平山敏治郎「取越正月の研究」（平山敏治郎『歳時習俗考』法政大学出版局、一九八四年）。近年刊行された『講座日本民俗学三　行事と祭礼』（朝倉書店、二〇二一年）の小川直之「正月行事」においても、平山論文を参照し、流行正月を「『時』がリセットされる」という正月の意味を「もっとも端的に示す」例としている。

（4）前掲平山論文、二七六頁

（5）宮田登『正月とハレの日の民俗学』（大和書房、一九九七年、二七頁）

（6）宮田は「世直り」「世直し」について、語義的には「世直し」は使役形で自律的な意図が認められ、「世直り」は受身形で他律的な状況が想定され「他からもたらされるこの世の変革」が考えられるとする。そして、「世直り」と「世直し」には「本質的差異は必ずしも明確ではない」としつつ、「世直し」は俗的次元の改まりが前提にあり、「世直り」は自然現象の移行・他律的状況の推移によると指摘する（宮田登「『世直し』の原義――歴史学と民俗学の接点から――」『宮田登日本を語る二　すくいの神とお富士さん』吉川弘文館、二〇〇六年）。戦後歴史学のような他律的な「世直り」から「民衆の自主的な表現」が認められる「世直し」へというような民俗から社会運動へという展開をいうのではなく、両者に「本質的差異」はなく地続きとして見ているのが宮田の特色といえよう。

（7）宮田登『新訂版　ミロク信仰の研究』（未来社、一九七五年）

（8）落合延孝「フォークロアから運動へ」（藪田貫編『民衆運動史三　社会と秩序』青木書店、二〇〇〇年）

（9）安丸良夫「民俗の変容と葛藤」（『安丸良夫集　第四巻　近代化日本の深層』岩波書店、二〇一三年、二〇～二一頁）

（10）前掲平山論文、二七八頁

（11）宮田登『終末観の民俗学』（ちくま学芸文庫、一九九八年）

（12）朝尾直弘「十八世紀の社会変動と身分的中間層」（『朝尾直弘著作集　第七巻　身分制社会論』岩波書店、二〇〇四年）

（13）『改訂史籍集覧』第一七冊（すみや書房発行、一九六八年）

（14）『宝暦雑録』（『上方芸文叢刊八　上方巷談集』上方芸文叢刊刊行会、一九八二年）

（15）前掲平山論文

（16）淀渡辺家文書「新菌朶集」。平山敏治郎は渡辺家で同史料を閲覧してたが、現在、同家の文書は京都市歴史資料館に寄託されており（受け入れ番号F035）、そのなかに「新菌朶集」も含まれている。

（17）前掲平山論文

（18）「新菌朶集」

（19）「同右」

（20）『宝暦雑録』

（21）『摂陽奇観』（『浪速叢書』第四、名著出版、一九七八年）

(22)『宝暦雑録』にいう有馬から尼崎という経路を考えれば、丹波から三田を経て有馬、尼崎という山陰方面からのルートを想定した方がいいだろう。ただし、「新歯朶集」にあるような姫路城での噂を伴っていたとすれば、山陽道から伝播した可能性も捨てきれない。

(23)『宝暦雑録』

(24)「新歯朶集」

(25)「日録　宝暦九年己卯」（『本居宣長全集』第一六巻、筑摩書房、一九七四年）

(26)「玉尾家永代帳」一五（国立史料館編『史料館叢書一〇　近江国鏡村玉尾家永代帳』東京大学出版会、一九八八年）

(27)「解題」（国立史料館編『史料館所蔵史料目録』第二三集、一九七四年）

(28)前掲平山論文、二七八頁

(29)井原西鶴『武道伝来記』巻一（岩波文庫、一九六七年）では、流行正月をしなければ「人間、三合になるべし」という神託で「おどし」た宗教者のことを述べる。ここでは、「女は子共の身の上を思ひ」と子どもたちの安全を願って、いわば万が一の保険として流行正月を行う様子が描かれる。

(30)ダニエル・カーネマン（村井章子訳）『ファスト&スロー』上・下（早川書房、二〇一四年）

(31)こうした豊年の後での疫病流行の予言が成功したことが、この後、一九世紀に見える「予言獣」が豊凶をセットで語る様式につながったのではないだろうか。「予言獣」については、湯本豪一『日本の幻獣図譜』（東京美術、二〇一六年）、常光徹「流行病と予言獣」（『妖怪の通り道』吉川弘文館、二〇一三年）。なお、近世の「予言獣」は、流行正月のような全国的な流布は見られず、内容的に似たところがあったとしても同列に論じるべきではないと考える。「予言獣」に関する瓦版などは、摺り物を通して拡大した流行正月の模倣、あるいはパロディ商品として理解すべきであろう。商品としての予言獣瓦版について論じたものに、笹方政紀「護符信仰と人魚の効能」（東アジア恠異学会編『怪異学の地平』臨川書店、二〇一八年）がある。

(32)「新歯朶集」

(33)「新歯朶集」

(34)「新歯朶集」

(35)以下に挙げる史料に加えて、安永七年（一七七八）から間もない天明元年（一七八一）刊かとされる恋川春町による黄表紙『無益委記』の趣向にも採用されている。

(36)『洗革』国立国会図書館蔵（請求番号863-80）国立国会図書館デジタルコレクションにて閲覧

(37)『半日閑話』巻一四（『日本随筆大成』第一期第八巻、吉川弘文館、一九八〇年、三五三頁）

(38)『籠耳集』（『浪速叢書』第一一、名著出版、一九七八年）

(39)『摂陽奇観』巻三五（『浪速叢書』第四、名著出版、一九七八年、三一一頁）

(40)『続史愚抄』八一巻。

(41)柳原紀光は、自身の随筆『閑窓自語』において、後桃園天皇が「禁中にはトカゲはいない」とかねてから聞いていたが、安永七年（一七七八）春に庭でトカゲをみかけたこと、「宮中に集る事このましからず」とされるホトトギスが「女御御亭」にいたことを挙げて「御代久しかるましきしるしにはさま〳〵のさとし多かりける」と記している（『日本随筆大成』第二期第八巻、二八三頁）。そして、同年七月には災害が相次ぎ、翌年の安永八年（一七七九）に当時の天皇だった後桃園天皇が在位中に二二歳の若さで死去している。柳原紀光が「不快」とするのは、流行正

月もこうした「御代久しかるましきしるし」と見えたからであろう。

（42）安永七年（一七七八）七月、水害や比叡山の山崩れなど大規模災害が発生した際、後桃園天皇は七社七寺に天下太平の祈祷を命じているが、これは万治三年（一六六〇）に後西天皇が行って以来、一一八年ぶりの民衆に身近な災害に対する国家祭祀の復興であったという（間瀬久美子「近世後期の朝廷と幕府の災害祈祷」『千葉経済論叢』第六一号、二〇一九年）。こうした国家祭祀の再興は、後桜町天皇以来の懸案であった。疫病流行下にあって、禁裏で流行正月が実施されたのも、災害に対する祭祀の一種という意識があったのかもしれない。

（43）『街談文々集要』巻一二（鈴木棠三編『近世庶民生活史料　街談文々集要』三一書房、一九九三年、三二一頁）。なお、同所の抄録改題本『豊芥子日記』巻中（『近世風俗見聞集』巻三、国書刊行会、一九一三年、四九七頁）もほぼ同文。なお、史料中の（ア）～（ウ）は村上。

（44）詳細不明。「文宝亭」は二代大田南畝のことと思われるが、『国書総目録』では「文宝亭筆まかせ」で立項はなく、大田南畝筆「筆まかせ」はあるが詳細不明。

（45）『梅園日記』（『日本随筆大成』第三期第一二巻、吉川弘文館、一九七七年）

（46）「荒蒔区有文書」（『改訂天理市史』史料編第一巻、天理市、一九七七年、三九五～六頁）

（47）小野区有文書「記録帳」（『志賀町誌』第五巻、滋賀県志賀町、二〇〇五年）。なお、この記録によれば、大津では「役所より被　仰出候ニハ、町中一統ニ賑ト被仰出」とあり、大津代官所からの指示で行われた（あるいは、そのように噂された）「町中一統ニ賑」の一手段として正月行事が執行されたとも考えられる。やはり、注（48）の例と同様に「にぎやかにする」ためになされた行為であろう。

（48）「福知堂村手覚年代記写」（『天理市史史料編　第一巻』（天理市、一九七七年）

（49）文字情報と近世の噂については、佐藤健二『流言蜚語――うわさを読み解く作法――』（有信堂高文社、一九九五年）参照。

（50）守屋毅『元禄文化――遊芸・悪所・芝居』（講談社学術文庫、二〇一一年、一六九頁）

（51）前掲朝尾論文

（52）メディアは、受け手に直接、強力な効果を及ぼすわけではなく、あくまでも限定的で一定の条件下でしか強力にはならない（吉見俊哉『メディア文化論』有斐閣、二〇〇四年）。メディアと流言については、佐藤卓己『流言のメディア史』（岩波新書、二〇一九年）。

（53）松田美佐『うわさとは何か――ネットで変容する「最も古いメディア」――』（中公新書、二〇一四年）

（54）「新歯朶集」。こうした視線は、つながらない（つながれない、つながることを望まない）人に対して排除や差別につながりうることも指摘しておく必要がある。「つながる」ことへの指向性がはらむ危険性も軽視してはなるまい。

（55）前掲朝尾論文

【付記】

本稿の執筆にあたり、「新歯朶集」の閲覧で、京都市歴史資料館の秋元せき氏のご高配をえました。末筆ながら、あつくお礼申し上げます。

Abstract

A Consideration of *"Hayari-Shogatsu"* − Historical consideration of early modern folklore −

Norio MURAKAMI

Key word：Hayari-Shogatsu,Kawaraban,Loss aversion